



野寺小だより

12月号

たんぽぽのように やさしく つよく のびのびと
～家庭・地域とともに一人一人が輝く野寺小学校～

児童数730名
令和5年12月1日

子どもの選択と大人の責任

岡田 智彦

人生には選択しなければならない時があります。というより、人生は選択の連続であり、そのどちらか（またはいずれか）を選択するかによってその後の人生が変化していきます。自己のパーソナリティによって選択しているのか、その様々な選択の結果パーソナリティが形成されているのか、もはや人格と選択は《にわとりと卵》のような関係とも感じられます。こう考えると、小学生の日常における些細な選択もまた、今後の人格形成において非常に重要であると言わざるを得ません。

昨今、子どもの選択を尊重する理解あるご家庭が多いように感じています。かつてあった《親が敷いたレールの上を走る人生》などといったものはあまり聞かなくなりました。子どもたちは誰と遊ぶ、何をして遊ぶといった日常的な選択はもちろんのこと、ピアノやスイミング、スポーツ等の習い事をする（しない）、塾に行く（行かない）、進路といった今後数年かかわってきそうな場面においても選択を自己決定できるようになってきました。躓き・失敗は若者の特権とは言いますが…果たして大丈夫なのでしょうか。われわれ大人は子どもの選択に際して、自主性を重んじるという大義のためとはいえ、見守るだけで本当によいのでしょうか。

コロンビア大学のシーナ・アイエンガー教授は厳格なシーク教徒の家庭で育ち、生活の何もかもが宗教によって決まる生活と、自由な意思決定が尊重されるアメリカでの生活を両面から体験し、選択について考えるようになったとのこと。彼女の著書『選択の科学』によると《選択は認知的不協和にも左右される》。つまり、自分はこういう人間である（またはこういう人間と思われている）という一貫した自己像に沿った選択をしがちである。また、未来の200円より今の100円といった目先の利益を選択してしまう人が多く、こうした小さな損の選択の積み重ねで人生全体から見ると大きく差がついてしまうこともあるとのこと。

子どもたちが信頼できる教師に出会った時、その理由の一つとして上位にあがるのは『ちゃんと叱ってくれる』というものです。このことからわかるように、子どもたちは誘惑に負けて自分の力では修正がきかなくなってしまったときに、誰かが強制的に前を向かせてくれることを願っています。子どもたちは自分にとって最良且つ厳しい選択をするには若すぎる（未成熟である）時があるのです。自主性を重んじると同時に、安きに流れがちな子どもたちの選択に遭遇した際には、苦言を呈し、修正を加えることもまた《大人の責任》なのではないでしょうか。